



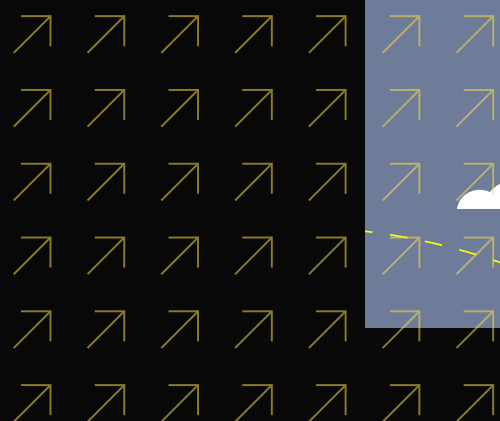
ビジネス優先のERPクラウド戦略へ - CIO向けガイドブック

成功するための **5** つのポイント

概要

ITリーダーとして成功できるかどうかは、ビジネスニーズをサポートするテクノロジーを提供できるかどうかにかかっています。現在、成功するためにはクラウドを避けては通れないと考えられており、「クラウドファースト」や「クラウドオンリー」といったアプローチは、多くのCIOにとって現実となっています。それらのプレッシャーに対する対策として、デジタルトランスフォーメーションやイノベーションに関するCEOやCFOが掲げる目標を必ずしもサポートするわけではないようなERP戦略を採用することは、非常に非効率で、厄介な問題を引き起こし、長期間にわたって足かせとなり、ビジネス全体に損害をもたらすことが明らかになっています。

クラウドが目的地であり、そこに到達できればビジネスが要求しているものを実現できると確信している場合、クラウドへの移行という旅路を歩む前に、落とし穴や回り道に備えた準備が必要となります。デジタルトランスフォーメーションやイノベーションをどのようにサポートするかという観点から、**クラウド戦略を策定**します。ビジネスロードマップにおけるクラウド化に向けたアクションがイノベーションの妨げとなるのではなく、**必ず効果的であることを確認**する必要があります。適切な「**初動**」を行うためにロードマップに優先順位を付けます。そして、会社がクラウドへの移行に伴う**副作用に耐えきれることを確認**する必要があります。



ITクラウド戦略は、ビジネスが推進しているものに基づくべきです。それでも、CIOには、アプリケーションやインフラストラクチャをクラウドに移行するように、というプレッシャーがかけられています。ベンダーは、コストや中断が生じるかどうかにかかわらず、またそうした変更を行うための確固たるビジネスケースも提示せずに、アプリケーションについてベンダー独自のSaaSソリューションにアップグレードまたは移行するように、ライセンスに勧めます。

多くの技術リーダーは、物理的なITインフラストラクチャをなくしていったため、2020年にデータセンターが廃墟と化すという問題に直面しています。それらのデータセンターの鍵をソフトウェアベンダーに完全に明け渡す前に、CIOはその明け渡し日から逆算して、ただデータセンターを停止する日を調整するだけでなく、デジタルトランスフォーメーションやイノベーションといったビジネス目標をサポートするクラウドロードマップを作成する必要があります。

クラウドへの移行において俊敏性と柔軟性が求められるとはいえ、この戦略を策定する際には慎重なアプローチを取る必要があります。以下の問いを考慮しておくことは、クラウドに至る道にはだかる障害を避けて通るのに役立ちます。

ERPのクラウド戦略をビジネス主導型ロードマップに合わせることは、クラウドへの移行を設計していくのに役立ちます。

質問1: あなたのクラウド戦略は、デジタルトランスフォーメーションやイノベーションをどのようにサポートするかという観点で策定されているか? 全体的なクラウド戦略が策定されていて、その中でパブリッククラウドとSaaSの両方の使用について言及しているでしょうか? クラウド戦略をビジネス主導型ロードマップに合わせることは、投資が守られ、クラウドへの移行を設計していくのに役立ちます。そうすることで、しっかりとビジネス戦略をサポートし、価値の低い、またはまったく価値のないプロジェクトに資金をつぎ込んでしまうことを避けられます。もちろん、資金に関する変化や問題は常に生じるので、現時点の支出を最適化する方法を見つけることは非常に重要です。では、どのようなクラウドの取り組みが特定の予算制約の中でビジネスをサポートしてくれるでしょうか? [第1章「ビジネス主導型ロードマップの必須事項」を参照してください。](#)

質問2: 計画にデータセンターのオフローディングが含まれる場合、ERPでは何を行う必要があるか? 直感的にERPもクラウドに移行すべきと考えたかもしれませんが、ERPベンダーもライセンスに、独自のクラウドテクノロジーに移行するようしきりに勧めてくるかもしれません。しかし、ERPクラウドへの移行に関するいくつかの誤解によって、本来進むべき道から逸らされてしまう恐れがあります。その道を進む前に、混乱を生じさせる可能性のあるクラウド移行を進めているときに、大規模なERPシフトを行うことに本当にビジネス価値があるかどうか考えてみてください。余計なコスト、リスク、混乱を招きながら、CFOのビジネス戦略実行能力を向上させるでしょうか? [第2章「クラウドERPに関する誤解と現実」を参照してください。](#)

質問 3: ロードマップにおけるクラウドの取り組みはイノベーションを促進させるか、それとも妨げるか? クラウド化を決定するということは、単に機能をクラウドに移して「クラウド化」することではなく、イノベーションを加速させ、デジタルイノベーションを可能にするクラウドテクノロジーを選択することを意味します。成長や競争上の優位性を向上させるといったビジネス目標をサポートするために、機能をクラウドに移行する方が良いのです。何らかのSaaS ERPアプリケーションを移行する予定はありますか? 製造、輸送、財務などのコアな機能や、その他の強固に統合されたトランザクション指向の機能を移行することは、CFOのビジネス戦略実行能力を向上させるでしょうか? [第3章「あなたのクラウド戦略はイノベーションを促進しているか、それとも妨げているか?」](#)を参照してください。

質問 4: どのクラウドへの移行を最初に行うべきか? クラウドロードマップにおいて短期決戦での成功を目指す場合、2つの実証済みのアクションが大きな成果をもたらします。1つ目は、ITインフラストラクチャの移行と向上です。これには、特定のERPベンダーに依存しないInfrastructure-as-a-Services (IaaS) プロバイダーへの「リフトアンドシフト」が含まれます。2つ目は、ビジネスの成長を可能にし、競争上の優位性をもたらすSystems Of Engagement (SOE) テクノロジーで、コア/トランザクションの多いSystems Of Record (SOR) を強化することです。これには、顧客体験の向上が含まれます。初期のクラウド投資は成長やイノベーションに関するビジネス目標をサポートしないテクノロジースタックに縛られるリスクを増やしますか? [第4章「クラウド戦略を迅速に進める」](#)を参照してください。

質問 5: クラウドベンダーのERPでなくても、ERPはクラウドできちんと機能し続けるか? 無数のクラウドの選択肢が市場に出回り、その増加ペースが上がっている今日、クラウドアプリケーションポートフォリオを構築していくことになる基盤をより強固なものとするように、5年、10年、それ以上の先を見据えて入念に計画すべき時と言えます。ERPクラウドへの移行について詳しくは、[第5章「クラウドERPに移行せずにERPをクラウドで利用する5つの方法」](#)を参照してください。

目次

01: ビジネス主導型ITロードマップの必須事項	6
02: クラウドERPに関する誤解と現実	8
03: あなたのクラウド戦略はイノベーションを促進しているか、それとも妨げているか?	12
04: クラウド戦略を迅速に進める	16
05: クラウドERPに移行せずにクラウドでERPを活用する5つの方法	19

01 ビジネス主導型ITロードマップの 必須事項

ビジネスの優先事項は、成長とイノベーションに変わってきています。これは、ITに求められていることが、効率化と標準化から、ビジネス主導の成果をもたらす、オープンかつ俊敏で、顧客エンゲージメントを向上させる企業にすることにシフトしていることを意味します。この動きを複雑にしているのは、クラウドを含め新しいデジタルテクノロジーをベンダーが市場に投入する頻度が上がっていることです。これは企業にとって、イノベーションをもたらすかどうか（そして、どのようにもたらすか）を見極める新たな機会ともなります。とはいえ、イノベーションへの投資は、「言うは易く行うは難し」でもあります。

多くのCIOは、将来のビジネス需要を満たせるように備えを行うに当たり、どのテクノロジーに投資すべきか迷っています。提供されるIT製品やサービスが絶えず変化しているため、クラウドテクノロジーを展開する際に、これまで築いてきたものを維持するか、それとも新しい製品のコンポーネントに取り換えるか決断を迫られています。これらの変更にかかるコストは上積みされますが、多くのCIOは、デジタルイノベーションやその他のイノベーションを起こしていくに当たり、CEOから追加の予算を得られるわけではありません。

大半のITリーダーは、自身のITロードマップを制御できていると信じていますが、ソフトウェアベンダーのロードマップに従わなければならない、さもなければサポートを失いかねないというプレッシャーを感じているリーダーも少なくありません。他のリーダーは、「クラウドファースト」のような一般的な戦略を、それらがビジネスをどのようにサポートするかを明確に示す「地図」もなしに、採用しなければならないというプレッシャーを感じています。これらのアプローチは、ビジネストランスフォーメーションやITの新たなミッションに沿ったものではありません。ベンダー主導型の変更を選択した場合、もっと優れたビジネス価値やイノベーションを実現するために使用できたかもしれないIT予算とリソースの大部分をそのベンダーに費やしてしまう可能性があります。

ビジネスニーズに迅速に 대응していくために、CIOは2つの真逆の戦略、つまりベンダー主導型とビジネス主導型のどちらかを選択する必要があります。

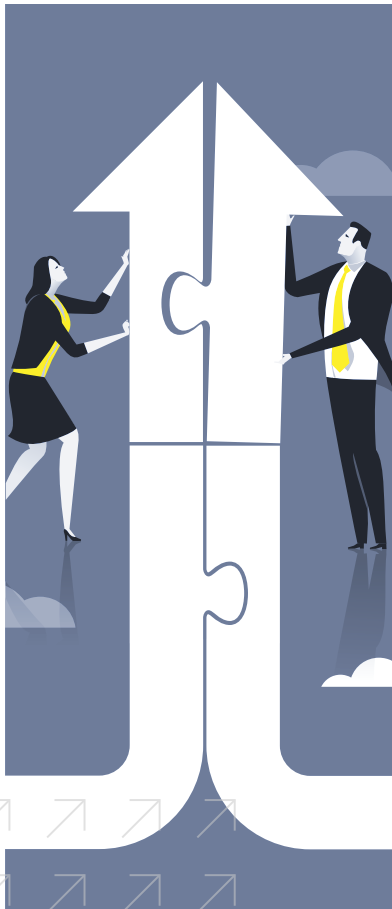
ビジネス主導型のロードマップとは？

ビジネス主導型のロードマップは、企業のビジネス戦略を、その目標を達成することを可能にするテクノロジーの取り組みに変換する、3年から10年の計画です。テクノロジーに対する投資がビジネスの目標、優先順位、リソース、タイミングに一致した場合には、そのロードマップはビジネス主導型になります。これは、ビジネス上に成果をもたらすテクノロジー投資がみえるハイレベルなロードマップとなります。

物理的なロードマップの考え方を取り入れ、それを企業に適用します。ロードマップは、ビジネス目標（ビジネス上の成果）を目的地として示します。また、そこに到達するための計画されたルートとして、IT戦略を示すものとなります。個々のテクノロジーに対する投資やプロジェクトを、その道中の通過点として示します。途中には回り道もあるかもしれませんが、この旅程はしっかりとした計画を持って出発する必要があります。

ロードマップは、
ビジネス目標（ま
たはビジネス上の
成果）を目的地
として示します。





ビジネス主導型ロードマップとその他のロードマップ（ベンダー主導型ロードマップなど）との主な違いは、目的地がビジネスによって定義されているかどうかです。たとえば、ロードマップに行く投資が、ビジネス目標に到達する方向へ企業をどのように動かすかが示されていないければ、定義された目的地がないことになるので、ビジネス主導型ではありません。アプリケーションとテクノロジーのロードマップも、ベンダーのロードマップや目標に沿って作成されているならば、それはビジネス主導型ではありません。エンタープライズソフトウェアベンダーの更新モジュールは、それらがビジネス目標を達成することに貢献すると確信すれば、ロードマップを計画する際に含めるべきです。しかし、ベンダーの更新モジュールは、戦略におけるルート、優先順位、タイミングを定めるものではありません。ビジネス主導型ロードマップはそれを決めていきます。

あらゆるものにフィットするロードマップなど存在しません。ロードマップの単一的な見方は、具体的なIT戦略が実行される方法が含まれるさまざまなアプリケーションやテクノロジーの階層を示すには、せま過ぎます。特定の新しいビジネス機能が実装される順番などの詳細を把握するために、より詳細に補足があるロードマップ（クラウド、機能、技術、インフラストラクチャ、セキュリティ、スキルなど）が、必要になる場合があります。同様に、特定の戦略が実行される方法（たとえば、クラウドレイヤーごとのクラウド移行）を示すロードマップが使用される場合もあります。それぞれのロードマップの図には、ビジネス目標に合わせて必要な優先順位とタイミングを反映する必要があります。

ビジネス主導型ロードマップは、計画されているソリューションを導入し維持するために必要なサポートのタイムラインの全体像です。これは、ビジネス主導型ロードマップに沿った結果生じるサポート要件の変更を可視化します。そして、人的リソースを再確認したり、スキルギャップを埋める計画を開始するための、サポートロードマップを作成するのに役立ちます。今後、エンタープライズソフトウェアのスキルを持つ人々の定年退職の波が訪れることと、新しいデジタルスキルの需要が急激に伸びることを考慮に入れると、リソースの獲得競争も厳しい状況が続くでしょう。

ビジネス主導型ロードマップに従うべき理由

ビジネスが静的であれば、またビジネスを成長させるテクノロジーが静的であれば、「変更のための旅路」は必要ないでしょう。変更をサポートするために必要なテクノロジーを確保する必要もほとんどないでしょう。ロードマップを持たないリスクも最低限のものになるでしょう。そして、「ここからここまで行く」必要が生じた場合にのみ、適切な投資を準備し、どのように計画を進めるかを選択し、ITがビジネス変化を可能にできるようなタイミングで投資を行います。クラウド戦略はその一例です。ビジネス主導型ロードマップは、必要性、実際のギャップ、ビジネス目標とITテクノロジー計画のずれを明らかにします。クラウド戦略はその一例です。ビジネス主導型ロードマップは、必要性、実際のギャップ、ビジネス目標とITテクノロジー計画のずれを明らかにします。

ベンダー主導型ロードマップから決別し、ビジネス主導型のIT投資計画に向けて移行する方法の詳細については、「[リサーチレポート：ビジネス主導型ロードマップが必要な理由](#)」を参照してください。

02

クラウドERPに関する 誤解と現実

CIOは、ERPをクラウドに移行するよう、さまざまな方面から絶えずプレッシャーをかけられています。ベンダーは自分たちのクラウドロードマップを勧めてきます。ビジネスでは、成長を達成し、競争上の優位性をもたらすクラウド機能の需要が高まっています。一部のCIOは、それをきちんと正当化するビジネスケースなしに、「クラウド化」することが目的で、クラウドERPに移行するように求められていると感じています。

頭字語	説明
IaaS	インターネット上のサービスとして提供されるネットワークなどのインフラストラクチャ
PaaS	インターネット上のサービスとして提供されるプラットフォーム
SaaS	インターネット上のサービスとして提供されるERPソフトウェア
OCPU	Oracle Computer Unit
SOR	System of Record
SOE	System of Engagement

クラウドERPに関する議論は大きく分けて2つの種類があります。それは、サービスとしてのインフラストラクチャ (IaaS) とサービスとしてのソフトウェア (SaaS) です。ERPインフラストラクチャをIaaSとしてのクラウドにホストすることによって、コストを削減し、企業の俊敏性と柔軟性を向上させることができます。ERPのような「Systems Of Record (SOR)」をSaaSに切り替えることは、ベンダーが宣伝しているよりも、リスクが高く、コストもかかる可能性があります。それでも、「Systems Of Engagement (SOE)」のためのSaaSは、イノベーションを加速させる可能性があります。

SaaSに移行することによってERPを刷新することは、イノベーションを促進し、成長を達成し、競争上の優位性をもたらすための適切な移行とは言えない場合があります。CIOがクラウドテクノロジーをERPロードマップに組み込む際、ERPをクラウドに移行することに関する、以下の一般的な誤解と現実を理解しておく必要があります。そして、その移行は、「クラウド化」を目的とするのではなく、あくまでもビジネスのためのものにする必要があります。

1. 一般的な誤解: ERPをSaaSスイートとしてクラウドにシフトすることは、業界最高のSaaSアプリケーションにシフトするよりも良い。

現実

ERPスイートをサービスとして運用することは、複雑さを排除することにも、強固に統合されたメリットを向上させることにもなりません。既にインストール版を利用しているERPライセンスにとって、SaaS ERPはあったとしてもごくわずかなビジネス上の向上しかもたらさず、むしろコストがかさみ、新たなリスクを抱え、混乱を引き起こす要因になりかねません。スイートをSaaSに完全に置き換えることのコストは、莫大なものになります。ERPをモダナイズし、イノベーションを加速させ、促進することを可能にする、業界最高のアプリケーションに費やせたはずのリソースの価値は計り知れません。

提案

ERPスイートを置き換える前に、アプリケーション戦略を評価し、SaaS ERPスイートによって要件が満たされることを確認します。また、SaaSは「一か八か」の選択肢として取り組む必要もありません。最も大きなメリットをもたらすクラス最高のSaaSについて検討します。そして、「クラウドファースト」のアプローチへのシフトが本当に適切かどうかを確かめます。ERPインフラストラクチャおよびアプリケーションに関するハイブリッド戦略は、これから先数年間、この分野の主流となっていくと思われます。

2. 一般的な誤解: 現在のERPベンダーからSaaSアプリケーションを購入するのが最適な戦略となる。

現実

ERPベンダーは、幅広い要件を満たせるように製品を開発しています。これは、業界最高のアプリケーションと比較すると、業界固有またはカスタマイズされたビジネスニーズに対して最善の選択肢にはならない可能性があることを意味します。また、通常、ERPベンダーのSaaS製品はベンダー独自のクラウドインフラストラクチャで稼働させるので、そのベンダーのクラウドインフラストラクチャに縛り付けられることとなります。

提案

ERPベンダーが提供するSaaSアプリケーションよりも優れた、複雑なビジネスニーズを満たすSaaSアプリケーションはたくさんあります。最善の戦略は、ビジネスニーズに合わせて、アプリケーションの選択を行うことです。ERPベンダーが提供する製品と比較して、業界最高のテクノロジーが提供する機能やその性能を評価し、自社のビジネスに最適なものは何かを判断します。ベンダーのクラウドインフラストラクチャに依存しないSaaS製品を選択することを検討してください。

3. 一般的な誤解: ERPベンダーのクラウドインフラストラクチャに移行するべきである。

現実

ERPベンダーのクラウドインフラストラクチャを採用すると、製品やサービスの選択を制限するプラットフォームに縛られる可能性があります。あなたが抱えるビジネスの複雑さに対応している業界最高の選択肢の代わりに、ベンダーのテクノロジースタックでしか稼働（または統合）しないアプリケーションに制限されることとなります。ERPベンダーのIaaSは、よりコストがかかる可能性もあります。たとえば、Oracle Compute Unit (OCPU) 単位のOracleの価格表には、クラウドインフラストラクチャのトータルコストが反映されていません。クラウドでERPを実行しなければならないその他の運用上の必要性を織り込むと、他のERPベンダーが提供するクラウドインフラストラクチャを運用するよりも高くなります。

提案

柔軟性と俊敏性を維持し、企業が変化に対応できるようにするために、ERPベンダーにとらわれないインフラストラクチャおよびプラットフォームのベンダー（Amazon Web ServicesまたはMicrosoft Azureなど）を検討してください。逆戻りする代償は高くつき、混乱も生じるため、クラウドテクノロジースタックの選択がビジネスロードマップをサポートすることをしっかりと確認します。IaaSに関する契約に、クラウドで運用する場合のすべてのコストが含まれていることを確認します。

最善の戦略は、ビジネスニーズに合わせて、アプリケーションを選択することです。

4. 一般的な誤解: 今のベンダーのSaaS ERPに移行するか、もしくはサポートを失うリスクを負うかの選択肢しかない。

現実

そうすることにビジネス価値がなければ、ERPをSaaSに移行する必要はありません。移行には、コストがかかり、リスクも伴い、混乱を生じさせる可能性があります。ERPベンダーの新しいSaaSプラットフォームは、ライセンスにではなく、ベンダーに利益をもたらすように設計されています。ベンダーの利益を生み出すための戦略では、価値を高めるといよりも、予定されているフルサポートの終了日に基づいて、ライセンスに新しいプラットフォームを求めるものとなっています。これらの新しいSaaS ERPプラットフォームは、現在ライセンスが支払っている料金の2~3倍も高くなる可能性があります¹。

提案

サポートを受け続けるために、独立系第三者保守サポートの選択肢を利用することもできます。SaaS ERPの分野が成熟するのを待っている間、コストやリスクを抑え、ROIを向上させるために安定した実証済みのERPリリースを運用し続けることができます²。

5. 一般的な誤解: SaaS ERPの機能性は現在のERPと一致している。

現実

限定された状況では、一部のSaaS ERPモジュールは、同等または十分な機能性を提供しています。しかし大半のSaaS ERPは、インストール版のERPが提供している機能性にはまだ到達していません。また、現在のERPでカスタマイズしたものをすべてを置き換えることはできません。これまでに自社のビジネスをサポートするためにERPをカスタマイズしてきた場合、SaaS ERP製品には必要とされる機能が欠けている可能性があります。

提案

SaaS ERPが提供するレベルの少ない機能で十分かどうか、現在のビジネスニーズを満たすカスタマイズしたERPを使用し続ける方が良いか、数年の間に必要とする機能が提供されるようになるか、確認してください。

6. 一般的な誤解: SaaS ERPはコストを削減できる。

現実

SaaS ERPに移行することは、コストを削減する面では必ずしも良い戦略となるわけではありません。たとえば、Oracleのクラウドライセンスは、オンプレミスにシステム構築し保守するのにかかるコストより、3倍も高い費用がかかります³。

提案

SaaS ERPの総所有コスト (TCO) を見積もる場合、「完全に置き換える」ことにかかる費用を加えます。これには、カスタマイズされたコードやインターフェースを交換するためにかかる費用も含まれます。IaaSの選択肢を見積もる場合、より正確なTCOを算出するために、ERP運用コスト (スケールアップ/ダウン、モニタリング、セキュリティサービスなど) を加えます。

¹<https://diginomica.com/oracle-cloud-growth-slowdown-spooks-wall-street>

²<https://news.sap.com/2014/10/sap-committed-innovation-choice-sap-business-suite/>

³<https://www.forbes.com/sites/jasonbloomberg/2017/07/11/oracles-cloud-strategy-ruthless-or-byzantine/#5b7708cd62d9>

7. 一般的な誤解: SaaS ERPの更新はシンプルで簡単である。

現実

カスタマイズされたコードやインターフェースが限られている、規模が小さくシンプルな展開では、これは当てはまります。それ以外の場合、より頻繁かつ即時のアップグレードが求められ、分析、構成、テスト、展開といったより困難なアップグレード作業が必要になります。

提案

アップグレードのタイミングと実行を制御できなくなると、アップグレードの混乱はほぼ継続的に発生するため、アップグレードのオーナーシップと頻度の変更に対応するために、アップグレードプロセスとガバナンスを確認および強化します。

8. 一般的な誤解: ERPのすべてをクラウドに移行する必要がある。

現実

これは、ほとんどの企業にとって賢明な移行とは言えません。すでにクラウドを採用したユーザーは、クラウドレイヤーによって結果が異なること、またERPソリューションの調達に対してハイブリッドアプローチを取ると、クラウドとオンプレミスの両方に良い結果をもたらすことを学んでいます。IaaSとPaaSは、複雑さを最低限に抑え、コスト効率の高い初動となることが証明されつつあります。SaaS ERPは、進化を遂げている最中の市場であり、取り組むべき機能面および運用上の課題も残されています。SaaS ERPへ移行しても、ほとんどの企業では、SORプロセスの運用能力は向上していません。また、ビジネスニーズに応えイノベーションを促進するうえで、必ずしもより優れた効果を企業にもたらすものになるとは限りません。

提案

クラウド化するという目的だけでクラウドに移行しないでください。ビジネスの必要性に応じて、移行を進めてください。ERPのすべてをクラウドに移行する代わりに、IaaSとPaaSのレイヤーから移行を開始してください。これにより、ITの柔軟性と俊敏性が向上し、企業は変化への耐性を高めることができます。ERPベンダーにとらわれない、つまり現在のERPベンダーのクラウドテクノロジースタックに縛られないようにするIaaS/PaaSのベンダーを検討してください。SaaS ERP市場が成熟するのを待ってください。それまでの間、SORと統合可能なSOEアプリケーションを利用してイノベーションを起こしてください。

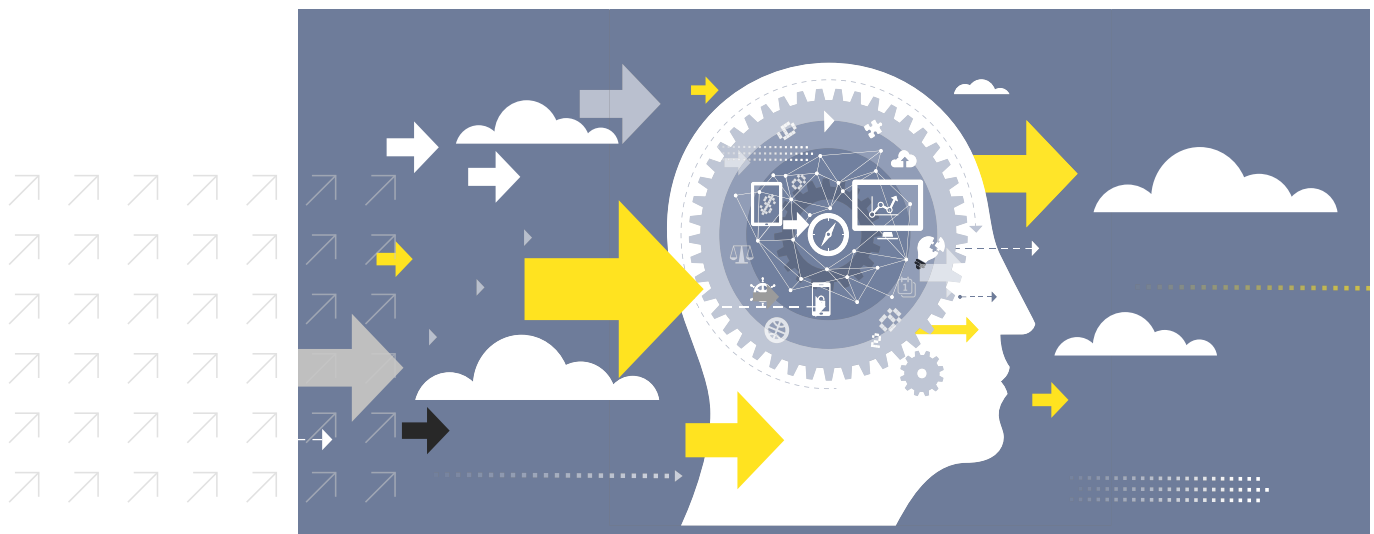
適切な移行を促す

PaaSおよびIaaSは、対象範囲を適切に定めると、成長とイノベーションを大いに促すものとなります。とはいえ、SaaS ERPへの移行が、必ずしも正しい方向であるとは限りません。内部に展開されているERPをIaaSとしてベンダーに依存しないオープンなクラウドインフラストラクチャに移行すれば、あまり混乱を引きおこさずに低いコストでより多くの利益をもたらせます。一方、その他のSaaSテクノロジーを用いて、特に顧客体験を改善するSOEの分野でイノベーションを進めます。これは、ビジネスニーズによりクラウド化が促進され、競争優位性や成長を支える素晴らしい方法です。

03

あなたのクラウド戦略はイノベーションを促進しているか、それとも妨げているか？

CIOは、さまざまな理由でクラウドについて検討しています。それらの理由の多くは、アプリケーション戦略の再考を強いています。アプリケーションやインフラストラクチャをクラウドに移行しなければならないというプレッシャーを感じているのは、あなただけではありません。では、どのクラウドに移行するのが適切でしょうか？



クラウドに移行する最も重要な理由の1つは、**イノベーションが競争優位性をもたらす**ということにあります。一部のクラウド戦略はイノベーションを促進している一方で、それを遅らせたり、妨げたりするものもあります。たとえば、クラウドにインフラストラクチャを移行することによって、企業が変化する能力を高めることができ（**柔軟性**）、ITの変更もより迅速になります（**俊敏性**）。企業が顧客やユーザーとやりとりできるSaaSテクノロジーを採用すれば、競争優位性を向上することができます。たとえば、これには連想ビジネスインテリジェンスを提供するQlikや、顧客体験を向上させるSalesforceを使用することが含まれます。一方、ERPをSaaSとしてクラウドに移行しても、多くの企業では良い結果をもたらしていません。なぜなら、その移行を行っても意義ある改善がビジネスにもたらされておらず、逆に、イノベーションを促進するために使用できたかもしれないリソースを移行に使ってしまっているからです。

新しいクラウドテクノロジーが急激なペースで市場にもたらされているので、適切なクラウド戦略を選択することは複雑になっています。CIOは、クラウドに関する決断を下す際、ただ「クラウドに置く」ことを目的として機能をクラウドに移行するのではなく、イノベーションを促進しデジタルイノベーションを可能にするクラウドテクノロジーを選択する必要があります。成長や競争優位性の向上などのビジネス目標をサポートするために、機能をクラウドに移行します。価値が得られない限り、製造、輸送、財務などのコアなERP機能をSaaSに移行することは避けます。

以下は、イノベーションロードマップを妨げる、または促進する一般的なクラウド戦略です。

イノベーションを妨げる恐れのある避けるべきERPクラウド戦略

- 1. ERPをSaaSのようなクラウドに移行する:** 差別化されていない機能を、異なるプラットフォーム（クラウド）へ移行することは価値が低く、ほとんどの企業にとって賢明な移行とは言えません。ERPは非常に複雑なため、SaaSへの移行には高いコストがかかり、混乱を招く可能性があります。SaaS ERPは、機能面でまだ進化を遂げている最中の市場であり、取り組むべき運用上の課題も残されています。さらに、SaaS ERPは、大半の企業にとって、SORプロセスの運用能力を改善するものとはならないため、ほとんどの企業にとって移行を行うべきであると判断するようなビジネスケースはありません。SaaS ERPに投資すると、ビジネスに差別化をもたらす可能性のあるデジタルイニシアチブから焦点とリソースを逸らすことになってしまいます。それは、成長やイノベーションといったビジネス需要によりよい方法で応える力を企業にもたらすものとはなりません。
- 2. ビジネス価値やROIについて検討せずにERPベンダーのクラウドロードマップに追従する:** ベンダー主導型ロードマップに従うことは、イノベーションに関するビジネス上の優先事項からリソースを逸らすことになり、自分たちにそれほど合っていないものに多くのコストを費やしてしまう恐れがあります。たとえば、Oracleのクラウドライセンスには、オンプレミスにシステムを構築し、保守するのにかかるコストより、3倍も高い費用がかかります⁴。SAPのある投資家向けシンポジウムで、SAPのCFOが明らかにした数字と照らし合わせると、SAP Cloudアプリケーションに切り替えたSAPライセンスは、現在の年間保守料金よりも平均で2倍多く支払うことになります⁵。
- 3. ベンダーのロードマップに従ってイノベーションの機会を逃す:** ライセンス下取りプログラムがその一例です。監査を回避するため、または価格を下げるために既存のアプリケーションライセンスを下取りしてもらうことは、一見魅力的に見えるかもしれませんが、この手段を選択すると、それが本当に正しいクラウド戦略が確かめるための分析が行われていないのにも関わらず、そのベンダーのクラウド戦略にライセンスが縛られる恐れがあります。ERPベンダーのクラウド製品は、最も広範囲な必要条件を満たすように開発されてきました。つまり、業界固有のニーズ、またはカスタマイズされたビジネスニーズを満たすという観点では、そのクラスで最高の製品と比較して、最善の選択にはならない可能性があります。既存のライセンスを自社のクラウドロードマップに束縛する試みとして、ERPベンダーはそのベンダーが所有するクラウドインフラストラクチャに移行するように促します。注意してください。ERPベンダーのSaaS製品は、そのベンダーのクラウドインフラストラクチャ/laaSでしか運用できません。つまり、そのライセンスは1つのテクノロジープラットフォームに束縛される恐れがあり、その企業のビジネス目標を支える能力の妨げになる可能性があります。契約を結び、ベンダーのロードマップを一度歩み始めると、財政的にも、契約的にも、逆戻りすることも、道を変えることも非常に難しくなります。
- 4. 「クラウド化するために」アプリケーションをクラウドに移行する:** 一部のソフトウェアアプリケーションはビジネスをサポートしていますが、競合他社と差別化できないという点でコモディティと似ています。その例には、財務アプリケーションと統合ツール、製造システム、サプライチェーン実行システムなどがあります。これらのタイプのアプリケーションを「クラウド化するために」クラウドに移行しても、測定可能なビジネスや成果やテクノロジーの向上をもたらすものにはならない可能性が高いと言えます。むしろ、これらの価値の低い、あるいはまったく価値のないクラウド化プロジェクトは、ビジネスにもっと大きな成果をもたらすようなクラウドへの取り組みに費やすことができたはずの貴重なリソースや予算を無駄に消費することによって、イノベーションを促進する能力をそいでしまう恐れがあります。

⁴ <https://diginomica.com/2018/03/20/oracle-cloud-growth-slowdown-spooks-wall-street/>

⁵ SAP Investor Symposium、ニューヨーク、2014年2月4日

また、「コストを抑えるために」アプリケーションをクラウドに移行することも避けてください。クラウドへのアプリケーションの移行がコスト削減につながるというのは、ちまたにあふれる都市伝説の1つです。移行自体は決して安くありません。特に、カスタマイズや統合のために再構築を行う必要がある場合はコストがかさみます。継続中のサブスクリプション費用は、既存のライセンスおよび保守費用に比べ、2〜3倍は高くなるでしょう。

クラウドアプリケーションプロジェクトは、成長を促す、競争優位性をもたらす、イノベーションを促進するなどのビジネス目標に貢献する場合にのみ、クラウド戦略の一部として組み込むべきです。アプリケーションをクラウドロードマップに含める際、増えるコストに見合うメリットが得られるか慎重に検討してください。

イノベーションを促進するために取り入れるべきERPクラウド戦略

あなたが良識を持つCIOであれば、ITにかかる費用を貴重なものと見なしているでしょう。この見方は、クラウド投資にIT予算を振り分ける際、とりわけその投資がビジネスに最も大きな効果をもたらすようにするために、非常に重要になります。あなたのクラウド戦略は、成長を促進し、競争優位性をもたらすイノベーションを支える必要があります。言い換えるならば、あなたのクラウド戦略は、ビジネス目標が指標化されている、ビジネス主導型ロードマップに従うべきでしょう。IT投資をロードマップに組み込むには、例外なくそれらの指標を満たしている必要があります。今日、ビジネスはかつてないほど、ITがソリューションを提供するよりももっと速いスピードでイノベーションを求めています。CIOは、イノベーションを加速化させるクラウド戦略を見分け、採用していかなければいけません。イノベーションを加速化させる具体的な戦略には、以下のようなものがあります。

- 1. クラウドベースのテクノロジーでコアERPシステムを維持し、拡張する:** うまく機能しているERPシステムを適切に維持し、ユーザー対応（および顧客対応）ビジネスプロセスをサポートするクラウドベースの機能を導入します。クラウドへのERPの移行についてOracleおよびSAPライセンシーの計画を理解するために実施された最近の2件の調査では、それぞれ80%と65%の企業が、ベンダーのSaaS ERPへの移行について予定がないか決めていないことが示されました。⁶

ERPが貴重なITリソースを消費していない場合、顧客／ユーザーエンゲージメントをサポートするシステムに焦点を合わせることができます。このタイプのシステムは、ERPに付属するか、ERPの外部に配置されています。ERPよりゆるく結合されているため、クラウドに配置するのにERPよりコストや時間がかかりません。それらのシステムは、短時間で顧客／ユーザー体験を向上させ、ビジネスを成長させることができます。また、競争優位性をもたらすこともできます。ERPをクラウドに配置することが理にかなういくつかのシナリオはありますが（小規模〜中規模サイズの組織やERPがあまり複雑でない組織など）、ほとんどの企業はクラウドを活用して、SOEによりERP周辺機能を刷新しつつ、コアシステムを稼働させ続けています。

- 2. インフラストラクチャをモダナイズして、ITの変更能力を高め、ITがより迅速に変更できるようにする:** IT市場調査会社IDCは、「65%の組織が、2023年までにテクノロジープラットフォームに対して大規模な投資を行い、レガシーシステムを積極的にモダナイズする」と予測しています⁷。大半のCIOは、ソフトウェアを最適な最新のハードウェアで稼働させたいと願っています。つまり、ハードウェアが障害にならないようにするということです。データセンター業務から抜け出すことが、複雑さを最小限に抑えコストを最大限に生かす、イノベーションを支える最初のクラウド移行になることが明らかになってきています。IaaSおよびPaaSは、より低いコストでビジネスを大幅に拡大させることを可能にします。既存のアプリケーションの永続的ライセンスを「リフトアンドシフト」するこの方法は、ITリソースと予算に余裕を持たせつつ、変化に対応するために欠かせないITの柔軟性と俊敏性を向上させるものとなっています。IaaSおよびPaaSプロバイダーを自ら選択することによって、現在のERPベンダーのクラウドテクノロジスタックに縛られることを回避できます。一部のERPベンダーは独自のIaaSおよびPaaSを提供しています。しかし、それらの提供サービスは、インフラストラクチャとプラットフォームテクノロジーに莫大な投資を行っているAmazonやMicrosoftが提供しているサービスほど堅牢ではないようです。

⁶ <http://bit.ly/2lqUJPG> および <http://bit.ly/2GXblyx>: Rimini Street, Inc. が実施した 2 件の調査

⁷ <https://www.techrepublic.com/article/idc-digital-transformation-spending-will-eat-up-50-of-it-budgets-by-2023/>

3. デジタルビジネスモデルを支える新しいテクノロジーに移行する:

デジタルビジネス化するという事は、数多くのビジネスのイノベーション計画の中核となるコンポーネントです。既存のテクノロジーの一部は、モダン化しても、企業のデジタルプラットフォームの一部として十分に機能できない場合があります。たとえば、標準的な部品表を使用して大量生産をサポートするように設計された受注処理アプリケーションは、注文ごとに1つの製造リクエストが生成されるカスタム注文のような、オンラインでのカスタマイズ可能な注文にビジネスモデルが変更されると、対応しきれなくなる可能性があります。また、新しいテクノロジー（ドローンを使用して、保守上の問題が発生していないか設備を監視するなど）は、既存のテクノロジーアーキテクチャを破壊してしまうかもしれません（大量に送られてくる新規データが、既存のコンピューティング能力を超えてしまう、または既存のセキュリティアーキテクチャを破壊してしまうなど）。このようなシナリオでは、新しいテクノロジーに移行するには、その上にイノベーションを構築していき、しっかりとしたプラットフォームを据える必要があるでしょう。

新しいテクノロジーがイノベーションへのクリティカルパス上に存在する場合、それによってロードマップのベースが落ちるため、障害物として認識されるかもしれません。しかし、新しいテクノロジーを適切な場所に先行して配置することによって、それ以降の工程でイノベーションを加速させることができます。その新しいテクノロジーによって、ビジネスにとって最適で、迅速かつ効果的に採用していくことができるソリューションへの道が開かれているからです。

クラウド化のためにクラウドへ移行するのではなく、ビジネスを第一に考慮して進めることによって、適切に構築されると、**ERPクラウド戦略によって成長とイノベーションを加速させる**ことができます。しかしながら、ERPをクラウドに移行するようなアクションは、適切な戦略にはならない場合があります。オンプレミスに展開されているERPを、オープンでベンダーに依存しない、IaaSのようなクラウドインフラストラクチャに移行することによって、コストを削減し、混乱を抑えつつ、利益を上げることができます。一方で、その他のクラウドテクノロジー、とりわけ顧客体験を向上させる顧客対応またはユーザー対応システムでイノベーションを進めることができます。これは、ビジネスが本当に必要とすることに基づいてクラウドへの移行を進め、イノベーションを加速させる最適な方法になります。

ビジネスを支えるERPクラウド戦略の詳細については、[「Getting to the Cloud on Your Terms \(英語\)」](#)を参照してください。この記事では、重要なシステムをクラウドに移行する上で、ロードマップに基づいてビジネスの準備が整ったときに、独立系第三者のERPクラウドサポートがどのように役立つかを説明しています。



04

クラウド戦略を迅速に進める

クラウドへの移行を検討していますか？

CIOたちは、コスト削減、拡張性、より迅速なビジネス上の取り組みの提供／実現など、クラウドに移行するさまざまな理由を挙げます。同時に、インフラストラクチャからアプリケーションまでクラウドベンダーや製品の数も、急激に増加しています。IT市場の調査会社IDCは、2023年までに**デジタルトランスフォーメーション**にかかる支出は、IT予算の最大50%を占めるようになる⁸と予測しており、その大半はクラウドテクノロジーに費やされる見込みです。多くのCIOは、クラウドに移行しなければならないというプレッシャーがあまりに大きく、どのクラウドテクノロジーに投資すべきか判断を下す際に、時期尚早な決断を強いられています。「テクノロジーのために」クラウドソリューションを採用する代わりに、成長やイノベーションに関してビジネスが本当に必要としている事柄と一致している、つまり**「ビジネスのための」**クラウドソリューションであることを確かめてください。

CIOは、クラウドに移行する際、迅速かつコスト効率の良い移行を達成できるように懸命に努力しています。次の2つの取り組みが、クラウド戦略を迅速に達成するうえで役立ちます。

1. ハイパースケーリングを可能にするオープンで柔軟性に富むクラウドプラットフォームに、ITインフラストラクチャを移行する。
2. ビジネスの成長を可能にし、競争優位性をもたらすクラウドテクノロジーを用いてコアシステム(ERPなど)を強化する。

「クラウドへITインフラストラクチャを移行することで、資本支出と運用支出が削減されます。必要な分のコンピューティング能力に対してだけ料金を支払うことによって、利用されていないリソースにかかるコストを削減できるからです。また、社内のデータセンターハードウェアへの依存が減るため、ITハードウェアの保守費用も抑えられます。」

— Bob Violino氏、寄稿者、
InfoWorld

これらの実証済みの戦略によってイノベーションの機会がもたらされ、自信を持ってクラウドへの移行を進めることができます。それらの戦略は、アプリケーションベンダーの独自のテクノロジースタックに縛られるのを防ぎ、将来の成長およびイノベーションにも対応できる柔軟性を与えてくれます。

⁸<https://www.techrepublic.com/article/idc-digital-transformation-spending-will-eat-up-50-of-it-budgets-by-2023/>

ITインフラストラクチャをクラウドに移行する際は、プラットフォームを慎重に選ぶ

ITインフラストラクチャのIaaSへの移行（しばしば「リフトアンドシフト」とも呼ばれる）には、ビジネスアプリケーションの移行、カスタマイズされたコード、ホスト化されたサービスとのインターフェースの移行が含まれます。この場合、既存のアプリケーションライセンスやカスタマイズされたコードへの投資が無駄になることがなく、アプリケーションポートフォリオをそのまま保つことで、つまりそれらを自社保有のインフラストラクチャではなく第三者のインフラストラクチャでホストするようになるだけで、総保有コストを抑えながらこれまでと同等の機能適合性を実現できます。この戦略は、何年もかけて構築してきたすべてのものを維持しながら、それらをより高速なハードウェアで、しかも運用コストは抑えつつ実行できるようにするものと考えられます。

クラウドへのデータセンターの移行は、複雑さが最も少なく、コスト効率を最も向上させるクラウド戦略となり得ます。IaaSを使用すれば、コンピューターハードウェアを所有し保守する負担から解放されるだけでなく、インフラストラクチャを最新の状態に保つことが容易になります。IaaSは、ITがより柔軟に変更を適用できるようにすることで、より迅速に変更するための俊敏性を提供し、モダナイズする能力を高めることもできます。他のクラウドプロジェクトに比べ、IaaSを導入し稼働させることは比較的短期間で実現可能です。導入直後から、少なくとも見積もっても30%のコスト削減を達成できる可能性があります。⁹

IaaSによって、オンプレミスのデータセンターでの運用よりもコストを抑え、かなり低いコストでビジネスの大幅な拡大ができるとしても、**アプリケーションベンダー独自のIaaSを採用すると、多くの問題を抱え込む可能性があります**。ビジネスの複雑さに応じた業界最高の選択肢を得ることは出来ず、そのベンダーのテクノロジースタックで稼働する（またはそれらと統合する）アプリケーションしか選択できなくなってしまうのです。

アプリケーションベンダーが提供するIaaSは、割高になる場合もあります。コンピューティングユニット単位でのIaaSと密接に結びついた価格設定は魅力的に映るかもしれませんが、通常、クラウドインフラストラクチャのトータルコストに加算される二次的なコスト（ストレージやその他のコスト）は反映されていません。クラウドでアプリケーションを稼働させるためにかかる運用コストも加算すると、ベンダーのクラウドインフラストラクチャを利用した場合、さらに割高になる可能性があります。

業界アナリストは、Amazon Web Services (AWS) やMicrosoft Azureのような特定のベンダーに依存しないIaaSプロバイダーを「幅広いワークロードをサポートできる汎用性のあるプロバイダー」と見なしていますが、一方でOracleのクラウドIaaSのようなアプリケーションベンダー独自のソリューションは「主にそのベンダーの他のビジネス用のインフラストラクチャ基盤に留まる」と見なしています。¹⁰ **ベンダーに依存しないIaaSを利用することによって、ERPベンダーのクラウドテクノロジースタックに束縛されるというリスクを、最小限に抑えることができます。**

既存のアプリケーションの永続的ライセンスをIaaSに「リフトアンドシフト」すると、特定のオペレーションスキル（データベース、Web、オペレーティングシステムなどに関するスキル）の必要性が減ります。これらのスキルに関係するタスクの多くは、クラウドインフラストラクチャモデルで自動化されるからです。社内の運用に関わるスタッフと予算を、より重要度の高いビジネス上の取り組みに割り当てることができます。IaaSアプローチを採用する場合、運用とERPクラウドサポートプロセス、人員配置、スキル、予算を見直し、必要となる変更について把握します。役割／責任の評価を行い、変更による影響を確認します。

導入直後から少なくとも 30% のコスト削減を達成できる可能性があります。

⁹ <https://www.emergingtechnology.co.nz/blog/how-to-save-a-staggering-30-percent-when-moving-to-iaas>

¹⁰ Gartner社: 「Magic Quadrant for Cloud Infrastructure as a Service, Worldwide」、2019年7月16日

既存のエンタープライズアプリケーションをクラウドテクノロジーで強化し、 ビジネスの成長を促進する

大半の企業は、高度な機能を備え、安定したERPシステムを実装するために莫大な投資を行ってきました。そのようなシステムの多くは、特定のビジネスニーズを満たす構成やカスタマイズが施されています。順調に稼働していれば、企業のニーズに合わせて特別にカスタマイズされたERPは、長期にわたって高いROIを期待できる信頼性の高い堅牢な運用プラットフォームとして機能します。

アプリケーションベンダーの割高なERP保守プログラムには、通常、ビジネスにとって意味のあるイノベーションは含まれません。ベンダーの研究開発の大半は、現状は、新しいプラットフォームやリリースに集中しているからです。たとえば、SAPやOracleでは、フラッグシップERP製品に関する大きなアップデートは計画されていません。

[米国ガートナー社の2019 CIOアジェンダ調査 \(英語\)](#)によると、ERPが時代の流れを一変させる要因となると考える企業は、調査対象の3%以下に留まりました。この優先順位のシフトは、[CIOのビジネス主導型ロードマップ \(英語\)](#)に含められるERP投資額が減少していることを示している可能性があります。それでも、ERPベンダーのポリシーやサポートモデルに引き続き依存しているため、CIOは限られた予算、リソース、時間を、成長や競争優位性をもたらすことのない、ERPの「明かりを灯し続ける」ためのプロジェクトに費やす必要があります。

ERPのコア機能をまったく新しいSaaSプラットフォーム（クラウド）に移行することは、ほとんどの企業にとって賢い選択にはなりません。なぜなら、大抵のERPの展開は非常に複雑で、SaaSへのERPの移行には多額のコストが発生し、大きな混乱をきたす可能性があるからです。SaaS ERPを導入しても、ほとんどの企業は、成長とイノベーションを求めるビジネス需要によりよく対応できるわけではありません。加えて、SaaS ERPは、進化を遂げている最中のソリューションであり、取り組むべき機能面および運用上の課題もまだ残されています。成熟していない、そして機能面で劣るクラウドソリューションを本格的に導入する機会費用によって、潜在的に収益性の高いクラウド投資に遅れをとる、またはその機会を逃してしまいます。

ベストプラクティスは、予算と人員を、ビジネスにとって大きな意味を持つ取り組みに集中させることです。多くの企業は、ERPシステムへの投資を維持しながら、最先端のクラウドテクノロジーでイノベーションを推進しています。

迅速に進める

顧客やユーザーを魅了するシステムを含め、ビジネスを成長させ競争優位性をもたらす最適なクラウドベースの機能を導入することによって、クラウド戦略のスタートダッシュを実現してください。これらは通常、ERPに付属（またはERP外部に配置）されるため、費用や時間をかけずにクラウドで展開できます。この移行には、ERPに無理矢理合わせていた機能やアプリケーションの管理を複雑にしていた機能の置き換えが含まれる場合があります。これらのタイプのシステムへの変更はより頻繁に発生し、より迅速に提供される必要があるため、ERPとは切り離してこれらのシステムに対処することで、柔軟性と迅速性も向上します。

**ERP が時代の流れを
一変させる要因となると
考える企業は調査対象の
3% 以下に留まっています。**

05

クラウドERPに移行せずに クラウドでERPを活用する5つの方法

皆が疑うことなくクラウドに移行しています。どのようにクラウドを活用するかは、数百万ドルに値する問題です。間違った決定を下してしまうと、大金を捨てることになりま
す。正しく行えば、見返りは計り知れません。

クラウドのすべてが、自動的に物事を向上させたり、コストを抑えたり、イノベーションをもたらしたりするわけではありません。効率性は非常に高くなる可能性がありますが、必要以上の容量をプロビジョニングしてしまったり、自動スケールアップを構成したため
に、監視されていないサービスによって急に制御不能に陥ったりすることも容易に起こります。SaaSアプリケーションはサブスクリ
プションで利用することができますが、一度利用すると永続的にそのベンダーを使用し続けたいといけなくなったり、切り替えること
が非常に困難になったりする可能性があります。

「自律型である」とか「伸縮性が高い」といったポジティブな響きのする用語で飾られたクラウド製品であっても、自動的に成功する
ことが保証されているわけではありません。それらのサービスによって望まない方向へと導かれたいか確かめる必要があります。

ERPに関しては、あらゆるクラウド導入の選択肢について理解しておくことが、ベンダーが手早く簡単な方法としてプラットフォームを
SaaSという形で売り込んでくる場合には、特に重要と言えます。最も抵抗の少ない道を進む前に、別の選択肢について検討してくだ
さい。

1

理にかなう場合にSaaSを使用する

既に指摘されてきたことですが、SaaSには欠点があるかもしれません。多くの血と汗と涙を流して実装し、
完璧に仕上げてきたERPは、最終的には組織の「心臓と脳」になります。SaaS ERPに移行するということ
は、たとえ同じベンダーであっても、そのベンダーが定義する「ベストプラクティス」に合わないという理由
で、それまで多くの年月をかけて実装してきたカスタマイズされたコードや統合を無駄にしなければならない
場合があります。

さらに悪いことに、製造現場の自動化やサプライチェーン管理などの、最もビジネスに重要なERPアプリケ
ーションの一部について、同等の機能を持つSaaSアプリケーションがない場合もあります。

それでも、メリットの方がデメリットよりも大きいと判断するかもしれません。会社全体を移行しないとし
ても、SaaS ERPは特定の部門や新たに買収した企業でうまく機能するかもしれません。

他方、自社のERPの実装が、クラウドでもう一度やり直す必要があると思えるほど混沌としていると判断し
ている企業もあります。そのような場合でも通常、SaaS ERPを少しずつ導入し、数年間かかるかもしれない
移行期間中は、確立されているプラットフォームを使用し続けることができます。

2

信頼できるアプリケーションを「リフトアンドシフト」する

多くのライセンサーは、最新のERPを持たなくても満足できるので、むしろその他の利益を生み出すアプリ
ケーションに時間と人材を投資した方が良いでしょう。

組織のいわば「心臓移植」を必要とは考えず、新たな「筋肉」をつける必要があると、結論付ける人もいる
かもしれません。そのような場合、既存のERP（カスタマイズされたコードやすべて）をクラウドインフラ
ストラクチャで実行し始め、徐々に他のERPクラウドサービスを構築していくことができます。

既存のERPをクラウドホスティングに移行する（アプリケーション自体はほぼ変更しない）、この「リフトアンドシフト」戦略を軽んじる人に尋ねてみてください。たとえば、あるライセンサーは、クラウドプロバイダーが最新かつ業界最高のサーバーハードウェア上にOracle EBSシステムをセットアップしたということもあり、Oracle EBSシステムをクラウドにホスティングしましたが、そうすることによってより優れたパフォーマンスを獲得しました。これで、その企業はハードウェアの交換や更新について、また高可用性を達成することについて心配する必要がなくなりました。加えて、障害復旧（それまで手にしたことの無い機能）が、クラウドプロバイダーの分散アーキテクチャを利用するだけで、手に入ります。

3

世界最高クラスのインフラストラクチャを活用する

クラウドのようなデータセンターに相当な額の投資を行ってきたFortune 100に名を連ねる企業で働いていない限り、Amazon Web ServicesやMicrosoft Azureのような企業が提供するスケールメリットやDevOpsの専門知識には到底かないません。AmazonやMicrosoftは、100以上の国や地域で、200以上のデータセンターを構築するために多額の資金を費やしてきました。

自社でこのようなリソースを保有するなど考えたこともないでしょう。

4

最先端のクラウドリソースにアクセスする

IT部門を担当している場合、アプリケーションをクラウドに移行することによって実現できるメリットの1つの例として、機械学習の技術を応用し、現場の技術者のアクティビティを分析して、より効率的に技術者を配置できることがあります。これは、莫大な投資なしに簡単に始めることを可能にしてくれるクラウドツールを利用できなければ、容易に取り組めるものではありません。とはいえ、大規模な移行が必要になるわけではありません。

クラウドを戦略的に利用することによって、クラウドを利用していなければコストと技術的な障壁によって到底手にすることなどできなかったであろうソリューションを構築し始めることが可能になります。Datamationは、「Cloud Computing 2019: [Using the Cloud for Competitive Advantage \(英語\)](#)」のレポートで、同じ点を指摘しています。

アプリケーションとデータがすでにクラウドにあれば、高度なERPクラウドサービスの利用はより現実的なものとなります。それは、アプリケーションをただ「クラウド化」するのではなく、適切なクラウドに配置することを意味します。Microsoft、Amazon、Googleは、次世代のデータ管理ツールを構築するために莫大な資金を投資しており、あなたはそのメリットをかなりお手頃な値段で利用することができます。サーバーを注文し、インストールし、構成しなければならないなどのタスクを回避でき、最新のデータサービスをすぐに導入することができるのです。

5

クラウドの信用性を手に入れる

確かに、企業の世界には戦略変更があります。数年前なら、あなたがクラウドの採用について疑問を呈し、企業のリーダーがその忠告にうなずいたでしょう。しかし、今日、[モダナイゼーションの戦略としてクラウドにすべてを移行する \(英語\)](#) 準備が整っていないリーダーは、クラウドが将来の姿であることは「誰もが知っている」ため、説明できるようにしておかなければなりません。

そのような将来のビジョンを描いていることを示すことによって、企業のリーダーから良い評価を得ることができたとしても、実際に行う移行が、ビジネスに役立つどころか、害をもたらすようになれば、その評価も長く続かないでしょう。

すべてをクラウドに移行する必要はありません。そして、急ぐ必要はありません。要所を抑え、最も大きな良い効果をビジネスにもたらす可能性があるところから、クラウドテクノロジーを活用し始めましょう。



Pat Phelan

バイスプレジデント、マーケットリサーチ担当

Pat Phelanは、企業向けソフトウェア市場全体の調査を担当しています。これには、アプリケーションおよびテクノロジー戦略、ソフトウェアベンダーサポート、第三者保守サポート、ITリーダーシップ理論、企業ソフトウェアライセンスに量的および質的戦略インサイトを提供することによって行うビジネス開発および販売促進が含まれます。彼女は、エンタープライズアプリケーションのロードマップの計画（および管理）をサポートするために尽力しています。

リミニストリートに入社する前は、18年間米Gartner社でグローバルアナリストとして活躍していました。そこでは、エンタープライズソフトウェアおよびERP製品に関する調査担当部長を務め、第三者エンタープライズソフトウェアサポートを対象としたアナリストとしても実績を残しています。米Gartner社に勤務していた間、何千ものCIOおよびITリーダーに、ビジネスアプリケーションのライフサイクルやコストの管理に関する戦略や選択肢について調査およびアドバイスを提供してきました。約300の調査レポートを公開しています。米Gartner社に勤務する前は、Grant Thornton社でHRシステムの実践を管理していました。その前は、Ernst & Young社でHRシステムの実践の構築に貢献しました。ちなみに、彼女の経歴は、Marathon Oil社でのシステムアナリストから始まっています。

大学時代は、インディアナ州立大学で会計とコンピューターサイエンスを学びました。



Michael Bathon

バイスプレジデント、クラウドサービス担当

Michael Bathonは、リミニストリートのクラウドサービスの向上と成長においてリーダーシップを発揮しています。28年間、電気通信、マネージドサービス、クラウドテクノロジーの分野で経験を積んできました。EDS社でキャリアを開始して以来、Nextel社、Sprint社、Convergys社に勤務しました。そこでは、開発、製造、顧客対応の部門を率いました。リミニストリートに入社する前は、Goodman Networks社でIT部門を指揮していました。

また、Bathonは、リミニストリートのクライアントとして2回、一緒に働いた経験もあります。異なる2つの会社で、Oracleアプリケーションのコスト効果を向上させるために当社のサービスを利用しました。

彼は、ノートルダム大学を卒業し、フロリダ工科大学でMBAを取得しています。

Rimini Street®

riministreet.com/jp
contactjp@riministreet.com
twitter.com/riministreet_jp
[linkedin.com/company/rimini-street](https://www.linkedin.com/company/rimini-street)

© 2020 Rimini Street, Inc. All rights reserved. Rimini Street は、米国およびその他の国におけるリミニストリートの登録商標です。Rimini Street、Rimini Street ロゴ、およびその組み合わせ、その他TMの付いたマークは、リミニストリートの商標です。その他のすべての商標は、それぞれの所有者の財産権を構成するものであり、別段の記載がない限り、リミニストリートは、これらの商標保有者またはここに記載されているその他の企業との提携や協力関係にあるものでも、またそれらを支持しているものでもありません。この文書はRimini Street, Inc.（「リミニストリート」）により作成されたもので、Oracle Corporation、SAP SE、または他のいかなる団体によっても後援、承認、または関係付けられたものではありません。別途、書面による明示的な記載がない限り、リミニストリートは記載されている情報についていかなる責任も負わず、商品性または特定目的への適合性の黙示的保証を含みますが、それに限定されないすべての明示的、黙示的、または制定法上の保証を行いません。いかなる場合でもリミニストリートは、この情報の使用または使用が不可能な事態によって生じる直接的、間接的、結果的、懲罰的、特別的、または付随的損害のいずれに関する責任を負いかねます。リミニストリートは、第三者により提供された情報の正確性または完全性について一切の表明または保証を行わず、当該情報、サービス、または製品について随時変更する権利を有します。LR-65197 JP-121420